鮮血天使さま

白萩之右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鮮血天使さま

【Ｎコード】
Ｎ６８４３Ｖ

【作者名】
白萩之右

【あらすじ】
いじめられっ子の中学二年生、世良周防。ある日彼が、テロリストが学校を襲撃する妄想をしていると、本当にテロリストがやってきた。その日を境に周防の日常が大きく変わり、美少女と仲良くなったり、陰謀に巻き込まれていったりする。

序章

学校に来たら、教室に僕の机がなかった。またか、と思いながら教室の窓を覗き込むと、案の定机が校庭に投げ出されていた。ありがたいことに、椅子は投げられていない。面倒だと思いつつも、自分の机を取りに行くことにする。教室を出て行く時クラスの奴らは、蔑みと優越感に浸った目で僕を見ていた。クソッ。

そんなわけで僕こと世良周防は、いじめられっ子の中学生だ。机には何かしらイタズラをされ（ちなみに昨日は、机の中に大量のゴミが入っていた）死ねだの消えろだの罵られ、殴られたり蹴られたり。そんなスクールライフを送っている。

教師や親に相談できればいいのだが、親も教師もロクでもない奴なので、相談するだけ無駄。仕返しは、『その後』のことを考えると怖くてできない。そうなると学校に行きたくないのだが、あんな奴らのせいで不登校になるのは癪だし、ましてやいじめで自殺するのもまっぴらごめんだ。学校に通い続けることが、僕のせめてもの意地だった。

机を抱えて玄関まで着いたところで、ホームルームが始まる合図のチャイムが鳴った。

このチャイムが鳴るまでに、自分の教室にいないと遅刻の扱いになる。しかしチャイムが鳴って、しばらくしてから教室に来る教師もいるので、それまでに教室にいれば遅刻にはならなかったりする。

もしかしたら間に合うかもしれないと思い、少し急ぐことにした。そうして階段を上がり、教室までたどり着いた僕は扉を開ける。

「こらっ遅いぞ。机をとり行くのに何分かかっているんだ」

教壇にいる男が声を上げた。声の主は、クラスの担任の万藤だ。席についている奴らも、僕を見てクスクス笑っている。そうだ、そうなのだ。僕がいじめられているのを見て、平然と笑っている奴が担任なのだ。

こんな世界は滅べばいいと、今日も思った。

朝のホームルームが終わり、僕は一時間目の授業を受けていた。教科は国語である。

しかしまあ、不快な授業だ。国語が嫌いなわけではない。国語を教えている人間が不快なのだ。国語を教えているのは万藤だ。いじめを受けているのを知りながら、見て見ぬふりどころか、それを助長するようなことをしている教師様である。ある意味では、僕をいじめている奴らより腹立しい存在だった。

いっそ、テロリストが学校を襲撃でもすれば気分は晴れるのだろうか。そんな考えが浮かんだ僕は、それを脳内で実行してみることを決めた。

そうとなれば、どんな設定にするか。とりあえず教室にいる奴らは全員死亡。当然万藤も死亡。僕はテロリストにうまく取り入って助かろう。けどそれじゃ、今度はテロリストにパシリにされそうだな。よし、テロリストは殺そう。そして、そのあとに学校の奴らを皆殺しにしよう。

不登校になるのは嫌だが、かといって仕返しをする度胸がない僕には、こういう妄想が現実を生きる動力源になっていた。

妄想をふくらましていると、ふと何か違和感を覚えた。何だろうか、こう教室と外の世界と切り離された感じだ。しかし外の景色は何の変化はない。ただの気のせいか。それとも、本格的に精神が病んできてしまったのだろうか。多少の不安を覚えつつ、妄想に戻ろうとした時だった。

いきなり教室の扉が開いた。何事かと思い、僕を含めたクラス全員が、開いた扉に注目した。視線の先には銃を手にした、特殊部隊風の集団がいた。数は十人くらいだろうか。全員防弾と思われるベストを着て、フェイスマスクとゴーグルで顔を隠している。

日本でこんな格好をしているのは、自衛隊かサバゲーマー、あとは在日米軍ぐらいだが、どれも違うように思える。ならば連中は一

体何なのか。
――テロリストが学校を襲撃。
僕は妄想が現実となったことを直感した。
クラスの奴らは、何が起こったのかわからないといった感じで、僕を除いた全員がポカンとしている。
「全員動くな」
そう言いながら、テロリストは僕らにアサルト・ライフルを向けた。向けられたのはドイツ軍のＧ３６アサルト・ライフルを短くしたＧ３６Ｃだ。
テロリストの声は冷徹で、刃を突きつけられるような迫力があった。連中がためらいなく人を殺せる人種だとわかる。テロリストのたった一言で、教室にいる全員が凍りついた。
ただ一人の例外をのぞいては。
「な、何だ。君たちは」
例外が、万藤がテロリスト相手に声を張り上げた。
何をやっているのだろうか、こいつは。
「早くここから立ち去りたまえ。さもないと警察を呼ぶぞ」
警察を呼ぶと言われたテロリストは、腰に下げてあるホルスターから拳銃を抜く。そして面倒な奴を黙らせるように、万藤にそれを突きつけた。拳銃はヘッケラー＆コッホＵＳＰだった。
「ふん、そんな偽物の銃で私を脅せるとでも思っているのか」
だが万藤はテロリストの脅しに屈せず、喋るのをやめなかった。それどころか、やたらと強気な態度になっている。
「お前たちのような輩はさっさと――」
パンッ。
乾いた音が教室に響いたのと同時に、万藤の言葉は途絶えた。そのまま膝をつき、うつぶせに倒れた。頭から血液が大量にあふれ、教室の床に広がっていく。
つまりそれは、一つの、僕にとっては、喜ばしい事実を意味していた。

担任の万藤が撃たれて死んだ。
ざまあみろ。
とりあえず僕は、テロリストに心の中で拍手喝采を送っておく。
「こいつのようになりたくなかったら、全員我々に従え」
万藤を撃ち殺したテロリストが言った。

テロリストの指示で、クラスメイト全員が教室の後ろに集められた。クラスの奴らは皆、青ざめた顔して怯えていた。中には泣き出す奴や嘔吐している奴もいる。
一方の僕は、今すぐにでも笑いだしたいくらいに、この状況が愉快でたまらなかった。妄想の中で何回も殺してきた奴らが、実際に目の前で殺されそうなのである。というか、すでに一人死んでいる。これほど楽しいことはない。今の僕の心の中は、恐怖よりいじめられた恨みの方が勝っていた。
テロリストのうちの一人が、人を探すようにキョロキョロしながら、僕らを見ている。
笑うのをこらえているのが目に付いたのだろうか。テロリストは、泣いている奴や嘔吐している奴には目もくれず、僕の方へと視線を向け近づいてきた。
はっきり言って嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしない。
嫌な予感というものはよく当たるもので、僕はテロリストに髪をつかまれ、引きずられた。あおむけに倒され、腹を思い切り踏まれる。
「ぐはぁ」
踏まれた痛みが腹の内部まで伝わり、うめき声をあげてしまった。
テロリストはＧ３６Ｃの銃口を頭に向け、僕にとって絶望的な宣告をする。
「お前には死んでもらう。悪く思うなよ」
は？　今何て言った？　死ぬ？
そう思っている内に、テロリストはＧ３６Ｃの引き金を引いてい

た。
セミオートで射出された、直径５・５６ミリの弾丸が頭をめがけて飛んでくる。至近距離から放たれた弾丸は、僕の頭皮、頭蓋骨、脳を食い破り頭の中をグチャグチャにかき混ぜた。
体から力が抜け、意識がスーッと遠のいていく。視界から光が消え、何も見えない。これが死んでいく感覚なのだろうか。
僕の生きてきた意味って何だったのだろう。薄れゆく意識の中、そんな疑問が僕の中で浮かんだ。
僕には何の価値があった？
わかっていたんだ、何の価値もないって。
中学生の僕は、それを認めたくなくて、自分を特別だと思いたくて――非日常を望んだ。
けれども非日常の中でも、僕は特別じゃなくて、ただの中学二年で、いじめられっ子で、すぐ殺された。
脳みそがグチャグチャになっているせいか、いろんな感情が湧きでて混ざり合っていく。そして、なぜか笑いがこみ上げてきた。
いいや、いっそのこと笑ってしまえ。そう思って僕は、腹の底からゲラゲラと笑った。
……ん？
なぜ死んだはずなのに、僕は笑っているんだ？
奇跡的に助かったのか？
けれども僕は頭を撃ち抜かれた。助かる見込みなんてない。
だったらここはあの世なのか。天国と地獄どっちだ。
様々な思考が交錯しながら、視界に光が戻ってくる。視覚が完全に回復すると、僕を撃ったテロリストが目に入った。
どうやらここはあの世ではなく、この世らしい。
つまり僕は、なぜだか知らないが、生きているということだ。
「ば、化物……」
僕を撃ったテロリストがつぶやいた。その声は冷徹なものではなく、完全に怯えていた。

僕は立ち上がり、あたりを見回す。クラスの奴らは僕を驚いた、あるいは怯えた目で見ていた。顔を隠しているテロリスト達も似たような様子だった。

当たり前の反応だ。頭を撃たれた人間が生きているのだ、誰だって驚くだろう。それも、撃たれた後にゲラゲラ笑ったのである。軽くホラーな光景だ。

銃撃を受けた個所が熱い、傷が治っていく感覚がした。全身に快感が駆け抜けて、力がみなぎってくる。

心が歓喜していた。僕は生まれ変わったんだ。いじめられっ子の中学生から、特別な存在へ。何が特別かは分からないが、頭を撃たれて生きているんだ、きっと特別なのだろう。

今なら何でも出来そうな気がした。

そんなわけで僕は、僕を撃ったテロリストの首根っこをつかみ勢いよく押し倒した。ゴンッ、と嫌な音を立てテロリストは、頭を床に打ち付けられた。後頭部からドクドクと血を流している。さらに腹を踏まれたお返しにと、顔を力いっぱい踏みつけた。テロリストの顔は破裂して、床に肉片やら脳みそやらをまき散らした。

これが僕の初めての殺人であった。テロリストが相手とはいえ、罪の意識はかけらも感じなかった。それどころか、爽快な気分ですらあった。

仲間の死でスイッチが入ったのか、テロリストは目を覚ましたかのように、一斉に銃を僕に向けた。臨戦モードに入ったようだ。

「あははは、上等だよ」

銃を向けられ、僕はひどく興奮していた。胸の鼓動が高鳴り、頭の中は快感で満たされている。素手でテロリストを全滅させるくらい、造作もないように思えてくる。いや、造作もないことだ。僕の脳がそう告げてくる。ならやってやろうじゃないか。一番近くのテロリストに跳びかかろうとした時だった。

銃声がした。それも、リズムのついた連続した音だ。

次々にテロリストが倒れていく。倒れたテロリストからは、赤い

液体が流れ出ていた。
一人だけテロリストが立っていた。その手にはＵＳＰが握られている。間違いない、こいつが他のテロリストを撃った犯人だ。
なぜだ？　仲間割れにしては唐突過ぎる。
突然の事態に困惑する。
そんなこともお構いなしに、一人残ったテロリストはＵＳＰをホルスターにしまい、ゴーグルを外しフェイスマスクを脱いだ。
マスクの下の素顔を見て僕は息をのんだ。
そこには美少女がいた。年齢は僕と同じくらいで、ショートヘアの清楚な印象だ。
何より目を引くのが髪と瞳の色だった。それはきれいな白銀色をしていた。
テロリストを相手に、僕は天使を連想してしまった。
「ひさしぶりだね。ずっと会いたかったんだよ、セラフィム」
そう言って、美少女テロリストは僕に近づいてくる。
僕は思わず身構えたが、その両腕をつかまれる。彼女は両腕をつかんだまま顔を接近させてきた。
美少女テロリストは、ジッと僕の目を見つめてくる。
間近で見る白銀の瞳は、魂が吸い取られそうなほど美しかった。
彼女の瞳に心を奪われていたら、不意に唇にやわらかいものが触れた。
ハッとして意識を戻すと、美少女テロリストの唇と僕の唇が触れあっていた。
つまり彼女が、僕にキスをしてきたのだ。
頭の中が真っ白になった。
何も考えられない。
時が止まっているような錯覚に陥る。
放心している僕から彼女が唇を離すと――
ハッと目が覚めた。どうやら居眠りをしていたらしい。僕は机に

伏した格好になっていた。顔を上げると、教室はいつも通りの風景だった。テロリストが存在せず、万藤は生きている。つまりテロリスト襲撃も、美少女とのキスもすべて夢だったのだ。
そりゃそうだ。あんな都合のいい現実なんてありはしない。
現実というものはいつも残酷で、だから僕はいつも妄想にふけって、とうとうあんな夢まで見るようになったのだ。

けれども、残酷な現実はやがて疑わしいものとなっていく。

「暁河瑠志羽です。よろしくお願いします」
クラスに転校生がやってきた。転校生は女の子だ。美しい清楚な印象の容姿で、白銀の髪と瞳をしている。
教室から感嘆の声が漏れる。
無理もなかった。僕も彼女を見たとき、天使を連想したのだから。
暁河瑠志羽と名乗った転校生は、あの時のテロリストだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6843v/

鮮血天使さま

2011年9月23日03時30分発行